

報 告

NPO 法人育児グループにおけるコミュニティ・エンパワメントの影響要因

Factors Influencing Community Empowerment in the NPO which Support Child Care group

野田万里, 千田みゆき

Mari Noda, Miyuki Chida

キーワード：育児グループ, コミュニティ・エンパワメント, グループ活動支援

Key words : Childcare Groups, Community Empowerment, Group Activity Support

要 旨

目的

NPO 法人育児グループの中心的役割を担う方々が捉えたコミュニティ・エンパワメントの特徴とその影響要因を明らかにし、育児グループがコミュニティ・エンパワメントを推進する支援の示唆を得る。

方法

KJ 法を用いた質的因子探索研究であり、半構造化面接を実施した。

結果

NPO 育児グループ代表者 6 名の個別分析後、総合分析した。育児グループにおけるコミュニティ・エンパワメントの影響要因として、【活動の広がりにつながる支援者の存在と行政や地域の評価】【活動の経営安定の重要性と活動のための資金確保を工夫】が、コミュニティ・エンパワメントとして、【母親同士の居場所づくりや繋ぐ活動】【活動の創出による組織の成長・発展】【連携して実施する今後の活動】が抽出された。

考察

育児グループがコミュニティ・エンパワメントを推進するためには、組織運営の視点を持ち、支援者や行政と連携した活動の拡大を図るとともに、活動資金・場所の確保を行う必要があると考える。

I. はじめに

育児グループは、育児サークル、子育てサークル等と呼ばれている(益邑, 2004)。育児中の主に母親達が子どもを連れて集まり、育児に関する教育や相談を受けることができるグループのことであり(沼田, 2005)、住民グループのひとつとして捉えられる(星ら, 2010)。

育児サークルは、母親達が育児負担感あるいは育児不安の軽減と解消を図ることを目的として、自発的に寄り集まって形成するインフォーマルな活動集団であり(住田ら, 2000)、吉野ら(1997)は、母親達が自分の経験したことをさらに広げ、孤立しがちな母子の社会資源となり、地域の育児力を高める役割を果たしていると述べている。すなわち、育児グループが活発な活動を地域に

受付日：2019年9月30日 受理日：2020年2月3日

埼玉医科大学保健医療学部看護学科地域看護学領域

広く展開することは、育児グループ活動に直接参加する母親のみでなく、参加しない母親をも含めた、地域全体の子育て環境を強化し、誰もが安心して子育てができる地域を目指すコミュニティ・エンパワメントにつながる と考える。

成木 (2009) は、都市化や超高齢社会が進展する中で、コミュニケーション能力、人間関係の形成・維持能力等の弱化や欠如に起因する、人々の関係性およびコミュニティの崩壊という課題があり、これらに対しては、関係性の再構築やコミュニティの再生が求められると述べている。少子化・核家族化の進行の中での子育てにおける母親達の孤立を解決するためには、近隣地域の人々と直接触れ合い、コミュニケーションを深め、互いに繋がり支えあい、人々の関係性の再構築を図り、住民が自らの力で課題解決をするような地域づくりを行う必要がある。

保健師は、各種健康診査や保健指導、家庭訪問、グループ活動支援等を行う中で、個別ケースと地域への支援を同時に担う援助職である (大木, 2010a)。特に母子保健分野においては、両親学級後の交流会等からグループを立ち上げ、自主化を支援し、その活動を核として誰もが安心して子育てできる地域づくりを目指している。しかし一方で、保健師は日々の事業に追われ、地域に出て、育児グループを支援することが困難な現状がある (田上, 2013)。また、一般的に、育児グループは、準備期、創造期、継続・転換期、発展期のプロセスを辿る (大木, 2010b) といわれるが、グループの創造期に自主的な活動が定着すると、それを「自主化」というゴールに達したと捉え、支援を終了する場合も見受けられる (大木, 2010a)。

一方、コミュニティ・エンパワメントの観点から育児グループへの支援を捉えると、エンパワメントはプロセスを基調とした概念であり、様々な要因が相互に作用し1つ1つの段階を踏んで進展するため、単独・短期の介入ではエンパワメントを導けない (曾根, 2000; 麻原ら, 2003)。育児グループ活動がコミュニティ・エンパワメントのプロセスを辿るよう導くためには、継続・転換期及び発展期への支援を含めた保健師の育児グループへの継続的・長期的な支援が不可欠である。

NPO (Non-Profit Organization または Non-for-Profit Organization) は、社会性の高い事業を行う組織である (小山, 2005)。NPO 法人の育児グループは、行政主導ではなく、当事者である母親達が主体的に集まり形成しており、リーダーが存在し、自分達で自己決定しながら、継続的に活動している。また、その活動を通して地域社会への働きかけを行っている組織である。言い換えれば、準備期、創造期を過ぎ、継続・転換期、発展期にあると思われ、地域に影響を及ぼし、コミュニティ・エンパワ

メントのプロセスを辿っているコミュニティであると言える。

育児グループにおける先行研究は、その現状と課題、育児不安、参加の意味、グループ支援の方法に関するものが多く、コミュニティ・エンパワメントを視野に入れたものはない。そこで、本研究では、育児グループをコミュニティ・エンパワメントの視点で捉え、実際に現在コミュニティ・エンパワメントを推進している育児グループが、地域社会の中で周囲からどのような影響を受けているのかを明らかにし、その過程を記述することを通して、育児グループにおけるコミュニティ・エンパワメントの影響要因を検討したいと考えた。

II. 目的

本研究の目的は、NPO 法人育児グループの中心的役割を担う方々が捉えたコミュニティ・エンパワメントの特徴とその影響要因を明らかにし、育児グループがコミュニティ・エンパワメントを推進できる支援の示唆を得ることである。

III. 用語の定義

育児グループ：本研究では、子育て中の親たちが集う自主的なグループであり、かつ、会の企画運営に主体的に関わっているグループを指す。

コミュニティ・エンパワメント：誰もが安心して暮らせる健康な地域を目指して、組織や地域の人々が、対等な立場で互いに話し合い、合意の形成を行う中で、緩やかな絆でつながり、支えあう関係を形成し、共通の課題解決に向かうプロセスとする。

IV. 研究方法

1. 研究対象

A 県内の NPO 法人育児グループの代表者 6 名とした。NPO 法人育児グループは、定款等があり、組織的な活動を実際に行い、共通の課題解決に向けて、地域に影響を及ぼす活動をしている組織である。中山 (2007) は、「民主的な住民組織としての成長」、「住民組織の地域の課題解決への志向性」、「地域の社会資源としての住民組織の活動」の 3 領域を住民組織のコミュニティ・エンパワメント過程の質的評価指標としてあげている。このことから、今回の調査対象とした NPO 法人育児グループは、活動を通して実際にコミュニティ・エンパワメントを推進していると考えた。また、面接の対象をグループの代表者としたのは、グループ全体の活動状況と地域の他組織との対外的関係についてよく把握している

と考えたためである。

2. データの収集方法

1) 対象の選定

A 県がインターネットに公表している NPO データベースを基に、活動分野を「まちづくり」「子どもの健全育成」、キーワードに「子育て」を入力し、ヒットした 97 件のうち、主たる活動目的を乳幼児期の子育て支援と明記している 29 件を選出し、承諾が得られたグループの協力者に面接を行った。データ収集期間は、2015 年 7 月～9 月である。

2) 面接方法

協力者にコミュニティ・エンパワメントの定義を、前述のように説明した上で、「このグループが生まれたきっかけ」「グループがコミュニティ・エンパワメントを推進できている理由」を半構造化面接で質問した。面接の内容は対象者の承諾を得て IC レコーダーに録音した。

3. データの分析方法

録音したインタビュー内容を逐語録に起こし、質的統合法 (KJ 法) (山浦, 2012) により分析した。質的統合法 (KJ 法) は、説明のついていない現象を仮構造的に解釈し、有意味で合理的な全体像として把握することができる方法であり、個別の特性を明らかにした上で複数の個別群に内在する論理を発見できる特徴を持つ分析法である (山浦, 2008)。正木 (2008) は、質的統合法 (KJ 法) について研究方法論としての精度が高く、信用可能性、明解性ならびに確認可能性を保證することができる」と述べている。

各々の NPO 法人育児グループは、成り立ちも異なり、地域性による活動の違いや活動への影響等も考えられる。質的統合法 (KJ 法) は、個々のグループの特性を明らかにしながら全体像を把握できる方法であると考え、本研究に適していると判断した。

分析の手順は、以下のとおりである。

1) 信用可能性、明確性を高めるための手順

解釈の妥当性を確保するため、分析に際しては、質的統合法 (KJ 法) の研修を受講し、研究方法の習熟に努めた。また、分析の各段階で、質的研究に精通する研究指導者と協議・討議を重ね、何度も逐語録に戻り、矛盾はないかを確認しながら研究を進め、内容の信頼性と妥当性の確保に努めた。

2) 個別分析

対象者ごとに、(1)～(3)の手順で行った。

(1) ラベル作成

逐語録から、訴える内容が 1 つになるように素材を単位化し、120～200 字を目安として、「志」が 1 つ

含まれるように元ラベルを作成した。質的統合法 (KJ 法) では、志とは (=心+指し示す方向) であり、訴えようとする意味や内容を意味する (山浦, 2012)。

(2) グループ編成

元ラベルをカード化し、よく読み、全ての元ラベルを一望し、ラベルの文章全体で訴える方向性の似ているものを、研究目的であるコミュニティ・エンパワメントの影響要因に沿って、2～4 枚程度を目安に、内容が類似しているものをグループ化した。次に、類似グループ毎に、集めたカードの全体感から、グループの内容を表すような一文を考え、表札として記述し、新たなラベルとした。新たなラベルを元ラベルと同様に配置し、グループ化を繰り返し、ラベルを作成した。この過程を繰り返し、ラベルが 4～6 グループ程度まで集まったところで最終ラベルとした。

(3) 空間配置図とシンボルマークの作成

グループ編成の最終ラベル同士の関係を読み取り、その内容が最もわかる位置に配置し、相互の関係を示す関係記号と添え言葉を記入した。次に、最終ラベルの内容を端的に表すシンボルマークを作成した。シンボルマークは「事柄：エッセンス」の二重構造で表現した。その後、図解を説明する文章を作成し、その事例のもつストーリーを作成した。

3) 総合分析

総合分析は、個別分析の事例的性格から一步外に踏み出し、普遍的・法則的性格へと近づくプロセスであり、個別分析が事例の論理の抽出と個別性の把握であるのに対して、総合分析はそれらを踏まえた理論化の作業となる (山浦, 2012)。この考えを基に、総合分析を行った。

総合分析は、個別分析で得られた最終ラベルの 2 段階前のラベルと表札を素材とし、個別分析と同様の手順で行った。これは、個別分析の具体性を残しながら、抽象度が高すぎないレベルとして、最終ラベルの 2 段階下を使用するのが経験的に適切とされている (山浦, 2012) ためである。

4. 倫理的配慮

本研究は、埼玉医科大学保健医療学部倫理審査委員会の承認を得て行った (承認番号 M-59)。対象者には、研究の概要、研究参加の自由意志と途中辞退の保証、匿名化及び情報の保護等について書面と口頭で説明し、承諾書にて同意を得た。本研究に開示すべき COI はない。

IV. 結果

1. 研究対象者の概要

研究参加の同意を得た各グループの代表者 6 名を対象に、1 人 1 回、1 時間 11 分～1 時間 42 分、平均 1

表 1 研究協力者の概要

	性別	任意団体 設立時期	NPO 設立時期	正会員数	主な活動
グループ A 代表者	女性	2003 年頃	2007 年	約 30 名 (2015 年 7 月現在)	つどいの広場の業務受託, 子育て情報提供事業等
グループ B 代表者	女性	1999 年	2006 年	約 40 名 (2015 年 4 月現在)	子育てサロン, 子育て支援センターの業務受託, 子育て情報提供事業等
グループ C 代表者	女性	2002 年頃	2006 年	約 40 名 (2015 年 7 月現在)	子育てサロン, つどいの広場の業務受託, 子育て情報提供事業等
グループ D 代表者	女性	1999 年	2002 年	約 120 名 (2012 年 6 月現在)	子育て支援センター及びつどいの広場の業務受託, 保育ボランティア体験学習, 子育てフェスティバルの実施, 調査研究事業等
グループ E 代表者	女性	2000 年頃	2010 年	約 30 名 (2015 年 4 月現在)	子育てサロン, 出張ひろばの業務受託, 一時預かり, 出張託児, 生活サポート事業, 家事支援, 駅前でのイベントの実施等
グループ F 代表者	女性	1999 年	2003 年	約 420 名 (2014 年 5 月現在)	子育て支援センター及びつどいの広場, 児童センターの業務受託, 人材育成・教育研修事業, 調査研究事業, 東日本大震災復興支援等

表 2 構成要素：総合分析の最終ラベルと元ラベルの代表例

シンボルマーク	最終ラベル	元ラベルの代表例
母親同士の居場所づくりや繋ぐ活動 :共通の課題解決のために始めた母親同士の居場所づくりや繋ぐ活動	孤独や不安を持つ子育て中の母親達の共通の課題解決のために、地域の中で、自由に参加できる、母親同士が集まれる居場所づくりや繋ぐ活動を始めたのが活動のきっかけである	子育て中の人々が集まって会って話すことが出来る場は大切だと思うし、自分自身も人と会うところは、ちゃんと時間をとって、語っていきたくて思っているし、日々、言い続けている(グループB) 情報を知らず、孤独を感じ、不安を持つ母親がたくさんいるなら、自分の知っている情報を伝え、役に立ちたいと思ったのが活動のきっかけでもある(グループB) 自分の課題解決のためのネットワーク作りだったが、母親達も自分と同様に、課題解決を求めていたことがわかった(グループF)
活動の創出による組織の成長・発展 :母親達のニーズを基に学び合い協力しながら創り出す主体的活動は組織の成長・発展の契機	母親達のニーズを基に、共通の目的に向かい、情報を共有し、学び合い、協力し合い、自分の役割を果たしながら、同時に意味づけをして、主体的に活動を作り出していることが、組織の成長・発展に繋がっている	仲間と情報交換、学び合い、支えあい、活動を進めてきており、他組織を参考としつつも、自分達で自己決定しながら、地域の子育てに関する課題解決に向けた、活動を継続している(グループF) 母親達の思いを共有することが大切であり、活動を通して、スタッフも母親も共に成長できている(グループC) エンパワメントできている理由は、組織の目的・目標・目指す未来像等を丁寧に、総会や理事会、代表と話す機会等に確認したり、活動後には必ず記録を取るようにして、振り返りや反省、評価をきちんと行っている。それが、継続にもなっていると思う(グループB)
連携して実施する今後の活動 :他組織との連携による時代の波を捉えた地域と施策を繋ぐ役割	時代の波を捉え、他の様々な組織との連携を図りながら、活動の幅を広げてきており、誰もが住みやすい街になるように、NPOの立場として声をあげていくことで、施策にも影響を与えることが出来ると思うし、地域と施策を繋ぐ役割を果たしていかなければならないと思う	母親達の孤立した状況や虐待してしまうかもという不安な気持ちを理解することは大切であり、社会全体で子育てを担い合えるといいと思う(グループD) アンケート調査は活動開始時からずっと続けており、子育て中の母親の声をまとめて、国に届ける活動をしている。大事なことをみんなです共有しながら作ることで、活動理解にも大きな役割を果たしていると思うし、回答する母親達も自分の気持ちに気づいたり、異なる考えを知るきっかけにもなる(グループD) 子育てしやすい街をつくるには、他組織との連携が必要であり、自分達の組織だけでは実現しない。子育てしやすい街は、思いやりや優しさが街中にあふれ、地域であいさつできる街であり、高齢者も障がい者も同じである(グループE) 組織のスタッフと課題を共有しながら、行政の会議に参加しているが、NPOの立場として、子育てネットワークが会議で声をあげていくことで、施策にも影響を与えることができると思う(グループC)
活動の広がりにつながる支援者の存在と行政や地域の評価 :行政の行き届かない細やかな支援に対する見守りや助言と行政や地域の評価	活動を広げていく中で、今は、行政の行き届かない部分を補う、細やかな支援を担っており、家族や周囲の人々が見守ってくれたり、専門家が助言をしてくれたり、地域や行政が活動を認めて、評価してくれることは、必要であると思う	ネットワークの活動を認めてくれたり、周囲から暖かく見守る、支援センターの先生のような人も必要であるし、コーディネートをしてくれたり、意見を言ってくれる様な、大学教授等も必要であると思う(グループB) 活動に対する周囲の評価(見方)は、活動を始めた頃は厳しかったが、みんなです必死に勉強したり、活動を広げていく中で、今は、見方が変わり、家庭内でも、地域でも評価を受けている(グループF) 当事者ならではの視点で活動を続けており、今は、行政の行き届かない部分を補う、細やかな支援(支援ではなく母親達と共に活動するパートナー的活動)を担っており、市からも活動を認められている(グループC)
活動の経営安定の重要性と活動のための資金確保を工夫 :ベースとなる施設の確保と活動資金の厳しい中での資源の発掘・活用による資金確保の工夫	地域にとっても大きな存在となっているので、ベースとなる施設を持つなどの、経営の安定化を図ることは重要であるが、活動資金は厳しい状況にあるため、地域に埋もれている資源を発掘・活用し、より一層の資金確保のための工夫を検討している所である	行政の声掛けが集まったメンバーが、知恵を出し合い工夫しながら、自主的な活動を続ける中で、施設を持ったことは、活動のベースとなり、組織の発展に繋がったと思う(グループD) やりたいこと、やって行きたいことで、収益をあげていけたらいいが、委託金や補助金が打ち切りになったり、活動資金は厳しい状況にあるので、今後は、一部分、自分達でお金を出し合うことやクラウドファンディングも考えている(グループD) 組織が大きくなっていくと経営的な課題になってくるが、地域にとっても大きな存在になっているので、経営を安定させていくことが大事なことであり、上手く、経営を回していくことが代表の今一番の仕事である。マネジメントでしんどいことは、人繰りの問題やワークライフバランスの問題等たくさんある(グループF)

時間 23 分のインタビューを行った。6 名全員が女性で、グループの活動期間は、任意団体の頃からは概ね 12 ～ 16 年程度、NPO 法人化後は、5 ～ 12 年であった（表 1）。

2. 総合分析の結果

対象者 6 名の各々の個別分析を行い、次に総合分析を行ったが、本稿では総合分析について述べる。総合分析の元ラベルは 6 名それぞれの個別分析の最終ラベルから 2 段下がった 93 枚を用いた。この 93 枚からグループ編成 5 段階で 5 枚の最終ラベルを導き、シンボルマークを作成した。

総合分析の結果のシンボルマーク、最終ラベル、元ラベルの代表例については表 2 に示す。以下、シンボルマークを【 】, 最終ラベルを〈 〉で示し、各々、内容を代表する元ラベルを「 」で示す。なお、補足が必要な場合は（ ）内に記入した。

1) 【母親同士の居場所づくりや繋ぐ活動：共通の課題解決のために始めた母親同士の居場所づくりや繋ぐ活動】

「情報を知らず、孤独を感じ、不安を持つ母親がたくさんいるなら、自分の知っている情報を伝え、役に立ちたいと思ったのが活動のきっかけでもある（グループ B）」、「自分の課題解決のためのネットワーク作りだったが、母親達も自分と同様に、課題解決を求めていることがわかった（グループ F）」などの 7 枚の元ラベルから 3 段階を経て、最終ラベル〈孤独や不安等を持つ子育て中の母親達の共通の課題解決のために、地域の中で、自由に参加できる、母親同士が集まれる居場所づくりや繋ぐ活動を始めたのが活動のきっかけである〉を導いた。この最終ラベルから、【母親同士の居場所づくりや繋ぐ活動：共通の課題解決のために始めた母親同士の居場所づくりや繋ぐ活動】が抽出された。

2) 【活動の創出による組織の成長・発展：母親達のニーズを基に学び合い協力しながら創り出す主体的活動は組織の成長・発展の契機】

「組織の共通目的に向かい、情報共有を図りながら、それぞれが自分の役割を果たし、強みや特技を生かして活動していくことが、組織の大きな力となる（グループ A）」、「母親達の思いを共有することが大切であり、活動を通して、スタッフも母親も共に成長できている（グループ C）」などの 53 枚の元ラベルから 5 段階を経て、最終ラベル〈母親達のニーズを基に、共通の目的に向かい、情報を共有し、学び合い、協力し合い、自分の役割を果たしながら、同時に意味づけをして、主体的に活動を創り出していることが、組織の成長・発展に繋がっている〉を導いた。この最終ラベルから、【活動の創出による組織の成長・発展：母親達のニーズを基に学び合い協力しながら創り出す主体的活動は組織の成長・発展の契機】が抽出された。

3) 【連携して実施する今後の活動：他組織との連携による時代の波を捉えた地域と施策を繋ぐ役割】

「子育てしやすい街をつくるには、他組織との連携が必要であり、自分達の組織だけでは実現しない。子育てしやすい街は、思いやりや優しさが街中にあふれ、地域で挨拶できる街であり、高齢者も障がい者も同じである（グループ E）」、「組織のスタッフと課題を共有しながら、行政の会議に参加しているが、NPO の立場として、子育てネットワークが会議で声をあげていくことで、施策にも影響を与えることができると思う（グループ C）」などの 20 枚の元ラベルから 5 段階を経て、最終ラベル〈時代の波を捉え、他の様々な組織との連携を図りながら、活動の幅を広げてきており、誰もが住みやすい街になるように、NPO の立場として声をあげていくことで、施策にも影響を与えることが出来ると思うし、地域と施策を繋ぐ役割を果たしていかなければならないと思う〉を導いた。この最終ラベルから、【連携して実施する今後の活動：他組織との連携による時代の波を捉えた地域と施策を繋ぐ役割】が抽出された。

4) 【活動の広がり繋がる支援者の存在と行政や地域の評価】

「活動に対する周囲の評価（見方）は、活動を始めた頃は厳しかったが、みんなで必死に勉強したり、活動を広げていく中で、今は、見方が変わり、家庭内でも地域でも評価を受けている（グループ F）」、「当事者ならではの視点で活動を続けており、今は、行政の行き届かない部分を補う、細やかな支援（支援ではなく母親達と共に活動するパートナー的活動）を担っており、市からも活動を認められている（グループ C）」など 5 枚の元ラベルから 3 段階を経て、最終ラベル〈活動を広げていく中で、今は行政の行き届かない部分を補う細やかな支援を担っており、家族や周囲の人々が見守ってくれたり、専門家が助言をしてくれたり、地域や行政が活動を認めて評価してくれることは、必要であると思う〉を導いた。この最終ラベルから【活動の広がり繋がる支援者の存在と行政や地域の評価：行政の行き届かない細やかな支援に対する見守りや助言と行政や地域の評価】が抽出された。

5) 【活動の経営安定の重要性和活動のための資金確保を工夫：ベースとなる施設の確保と活動資金の厳しい中での資源の発掘・活用による資金確保の工夫】

「行政の声掛けで集まったメンバーが、知恵を出し合い工夫しながら、自主的な活動を続ける中で、施設を持ったことは、活動のベースとなり、組織の発展に繋がったと思う（グループ D）」、「組織が大きくなってくると経営的な課題になってくるが、地域にとっても大きな存在になっているので、経営を安定させていくことが大事

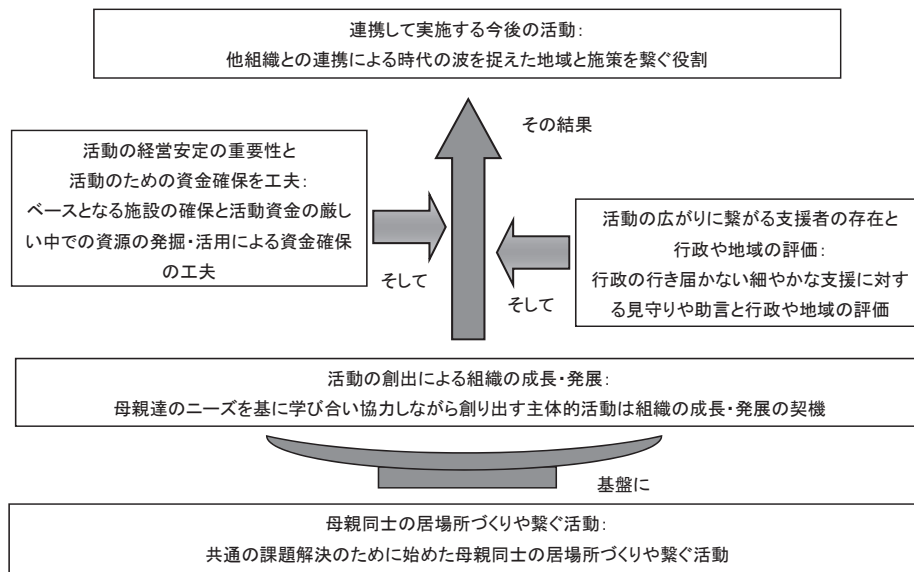


図1 NPO 法人育児グループにおけるコミュニティ・エンパワメントの空間配置図

なことであり、上手く、経営を回していくことが代表の今一番の仕事である。マネジメントでしんどいことは、人練りの問題やワークライフバランスの問題等たくさんある（グループF）」など8枚の元ラベルから4段階を経て、最終ラベル〈地域にとっても大きな存在となっているので、ベースとなる施設を持つなどの、経営の安定化を図ることは重要であるが、活動資金は厳しい状況にあるため、地域に埋もれている資源を発掘・活用し、より一層の資金確保のための工夫を検討している所である〉を導いた。この最終ラベルから、【活動の経営安定の重要性と活動のための資金確保を工夫：ベースとなる施設の確保と活動資金の厳しい中での資源の発掘・活用による資金確保の工夫】が抽出された。

5つのシンボルマークから空間配置図(図1)を作成し、ストーリーを導いた。

NPO 法人育児グループのコミュニティ・エンパワメントは、共通の課題解決のために【母親同士の居場所づくりや繋ぐ活動】を基盤としていた。母親達は自分達のニーズに沿って、主体的に情報を共有し、学び合い、協力しながら、【活動の創出による組織の成長・発展】に繋げていった。この組織の成長・発展には、【活動の広がりにつながる支援者の存在と行政や地域の評価】と【活動の経営安定の重要性と活動のための資金確保を工夫】することが影響を及ぼしていた。そのようなプロセスの中で、結果として、現在は時代を捉え、他の様々な組織と【連携して実施する今後の活動】を目指しており、地域と施策を繋ぐ役割を果たすために、その活動の幅を広げている。

V. 考察

1. コミュニティ・エンパワメントを推進している NPO 法人育児グループの特徴

コミュニティ・エンパワメントを推進している NPO 法人育児グループは、母親達のニーズを発端とし、共通の課題解決のために居場所づくりや繋ぐ活動をしていた。久木田(1998)は、エンパワメントのプロセスが起こるためには、まず目標としての価値の意識化、内発的な動機づけが行わなければならないと述べている。近年、少子化が進み、また、ベッドタウン化した都市近郊圏から都心に通勤している夫に育児への協力を得るのは難しく、母親が孤立しやすいといわれている。育児グループの生まれる背景には、育児の孤立という切迫した母親達のニーズがあると推測される。本研究の結果からも、母親達は個々のニーズを内発的動機とし、同じ立場で互いの話を傾聴し共感・対話する中から価値の意識化が行われ、共通の課題を見つけ、組織化し、居場所づくりや繋ぐ活動を始めていた。

また、母親の居場所づくりや母親同士を繋ぐ活動は、NPO 法人育児グループの活動に関わる人々が持つ個々の力をベースとし、学び合い協力しながら主体的に行われていた。そして、この活動を基盤として次の新たな活動へと活動の幅を広げていた。このように、母親同士が互いに学び合い、協力し合うことで、組織が成長し、活動の幅を広げてきたと考える。

さらに、NPO 法人育児グループは、同じ地域に存在する様々な他組織と連携して、地域の組織や人々と施策を繋ぐ役割を果たしており、地域の中で起きている母親達の現状を、組織外の人々や行政に働きかける活動を行

うことで、地域の施策に影響を与えていると思われた。

すなわち、研究対象とした NPO 法人育児グループには、共通の課題解決のための活動を基盤として始まり、グループ内で学び合い、協力し合い、主体的な活動を通して、組織として成長し、周囲からの様々な影響を受けながら、結果として、行政と協働し、施策に影響を与える組織へと発展するという特徴がみられた。大木 (2010c) は、地域のエンパワメントを意図した住民グループへの支援プロセスは、グループの発展過程に応じた支援が必要であると述べている。育児グループの成長を促すためには、育児グループの特徴を踏まえた準備期、創造期、継続・転換期、発展期の各段階に応じた保健師の支援が求められる。

2. NPO 法人育児グループにおけるコミュニティ・エンパワメントの影響要因

研究に協力いただいた NPO 法人育児グループでは、その活動を見守る人や支援者が増えたことにより、地域住民からの評価も高まり、より地域に根ざした活動を展開しながら、その活動の幅を広げ、さらに支援者を獲得し、行政の理解を得ていた。久木田 (1998) は、「自己決定」「潜在力への気づき」「効力感」が全て確保されて始めてエンパワメントが起こると述べている。活動に共感する支援者の存在と行政や地域の評価は、自分達のグループはうまくやれているという、効力感を高める効果があり、コミュニティ・エンパワメントの推進に影響を及ぼしていると考えられる。

一方、活動のベースとなる施設を持ち資金調達のために工夫することは、活動の発展に影響を及ぼしており、このようなベースとなる施設の確保や活動資金の確保は、安定した組織運営や事業の展開にとって、重要な要素であると思われた。子育てサークル活動研究会 (2001) は、活動を成立させる条件として、約 8 割の人が、活動する場所の確保と活動資金は必要条件だと考えていると報告している。星ら (2010) も活動場所の確保は、安定的な育児グループ活動を行うための基本条件であると述べている。育児グループがコミュニティ・エンパワメントを推進していくためには、安定したグループ基盤があること、その前提として活動場所の確保や活動資金の確保が必要であると考えられる。保健師は、当事者が自らの健康課題を解決するプロセスへの援助を核とし、地域を基盤に健康問題をとらえ、予防につながる組織的な取り組みを担い、公的責任を志向する公衆衛生看護専門職である (井伊ら, 2017)。地域をフィールドとして活動をしており、地域で活用できる様々な資源についても熟知していると思われる。NPO 法人育児グループが地域の資源を発掘し活用できるよう、保健師等の支援者はグループの活動状況に応じて情報提供をする必要がある

う。

育児グループのコミュニティ・エンパワメントを推進するためには、組織運営の視点を持つことが大切であり、支援者や行政と連携した活動の拡大を図るとともに、活動拠点となる場所と活動資金の確保も同時に行っていく必要性が示唆された。

VI. 結論

育児グループにおけるコミュニティ・エンパワメントの影響要因は、【活動の広がりに関与する支援者の存在と行政や地域の評価】【活動の経営安定の重要性と活動のための資金確保を工夫】の 2 点が導き出され、地域に根ざした組織運営の視点を持つことの重要性が示唆された。

VII. 本研究の限界と課題

本研究は A 県内の NPO 法人格を持つ育児グループの代表者を対象とした。このため、組織運営の視点が強調されたと考える。今後は、研究対象をグループ代表者以外の母親達にも拡大し、豊富なデータによる分析が必要であると考えられる。また、NPO 法人ではない育児グループにも今後調査を行い、比較検討していきたいと考える。

謝 辞

本研究に御協力いただきました各グループの代表者の皆様及びグループの皆様には厚く御礼を申し上げます。なお、本研究は筆頭者の埼玉医科大学大学院における修士論文を加筆・修正したものである。また、本研究は第 19 回日本地域看護学会学術集会において発表した。

文 献

- 麻原きよみ, 加藤典子, 宮崎紀枝 (2003) : グループ支援のための理論・技術・評価 - 地域看護に焦点を当てて グループ活動が地域に発展するための理論と技術, 看護研究, 36 (7), 49-63.
- 星旦二, 栗盛須雅子編 (2010) : 地域保健スタッフのための「住民グループ」のつくり方・育て方, 医学書院, 東京.
- 井伊久美子, 荒木田美香子, 松本珠実他 3 名編 (2017) : 新版保健師業務要覧第 3 版 2017 年度版, 日本看護協会出版会, 東京.
- 子育てサークル研究会 (2001) : 子育てサークルの活動に関する調査報告書, 国立女性教育会館.
- 久木田純 (1998) : エンパワーメントとは何か, 現代のエスプリ, 375, 10-34.

- 正木治恵（2008）：看護学研究における質的統合法（KJ法）の位置づけと学問的価値，看護研究，**41**（1），3-10.
- 益邑千草（2004）：地域における育児グループの育成・支援のありかた，共栄学園短期大学研究紀要，**20**，153-169.
- 中山貴美子（2007）：保健専門職による住民組織のコミュニティ・エンパワメント過程の質的評価指標の開発，日本地域看護学会誌，**10**（1），49-58.
- 成木弘子（2009）：都市での健康づくり活動に関するグループ支援を通じたコミュニティ・エンパワーメント，保健医療社会学論集，**19**（2），8-20.
- 沼田加代（2005）：育児グループの形態別にみた育児不安と育児グループの効果に関する検討，群馬保健学紀要，**25**，15-24.
- 大木幸子（2010a）：保健師の仕事 コミュニティ・エンパワメントのための援助技術 第6回「住民とのパートナーシップの形成」，保健師ジャーナル，**66**（6），570-575.
- 大木幸子（2010b）：Ⅱ章 1 子育てグループ，星旦二，栗盛須雅子編，地域保健スタッフのための「住民グループ」のつくり方・育て方，医学書院，東京，41-55.
- 大木幸子（2010c）：Ⅰ章 2「つくる・育てる」テクニック，星旦二，栗盛須雅子編，地域保健スタッフのための「住民グループ」のつくり方・育て方，医学書院，東京，15-35.
- 小山修（2005）：第6章 D.住民組織の活動とその支援，中村裕美子編著，標準保健師講座 2 地域看護技術，医学書院，東京，164-167.
- 曾根智史（2000）：今を読み解くキーワード集 ヘルスプロモーション エンパワメント，保健婦雑誌，**56**（12），1038-1039.
- 住田正樹，溝田めぐみ（2000）：母親の育児不安と育児サークル，九州大学大学院教育学研究紀要，**3**，23-43.
- 田上豊資（2013）：保健活動の「理念」と「現実」の乖離 現場の公衆衛生医師の立場で検討会に参加して，保健師ジャーナル，**69**（7），515-519.
- 山浦晴男（2008）：科学的な質的研究のための質的統合法（KJ法）と考察法の理論と技術，看護研究，**41**（1），11-32.
- 山浦晴男（2012）：質的統合法入門 考え方と手順，医学書院，東京.
- 吉野ひとみ，黒瀬寛子，保坂はるか他5名（1997）：育児グループが当事者および地域にもたらした効果，保健婦雑誌，**53**（4），301-307.